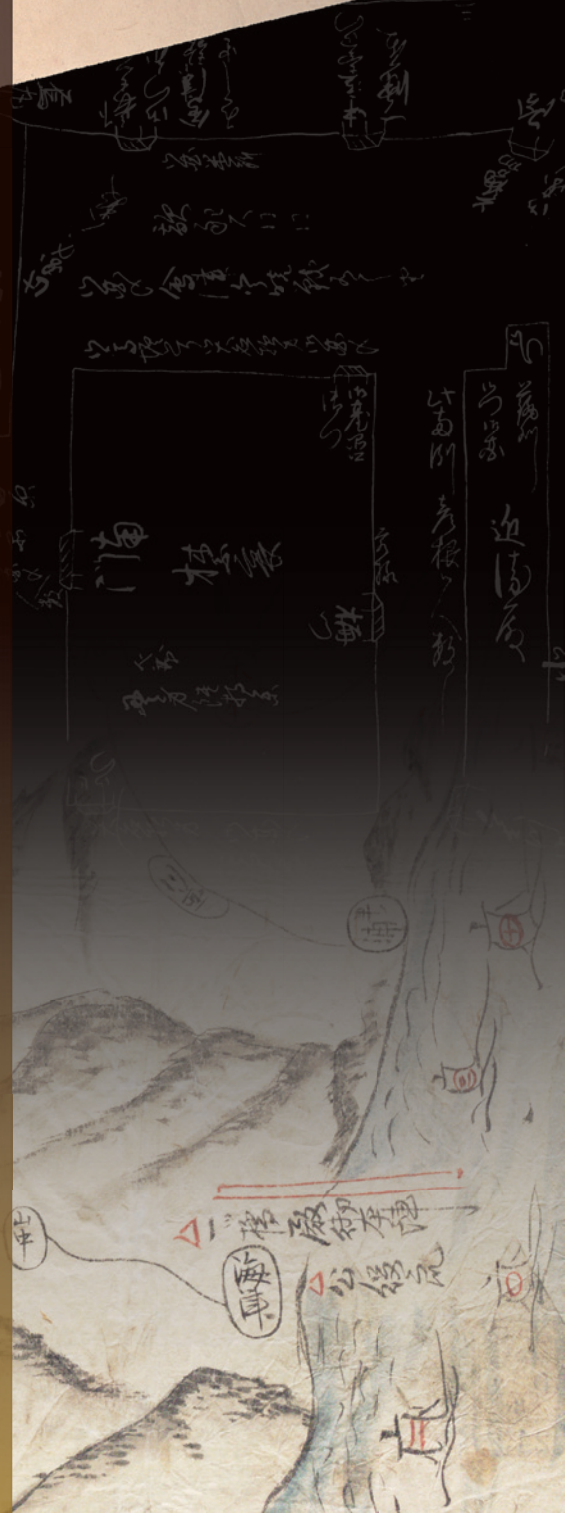


旗本高木家の幕末

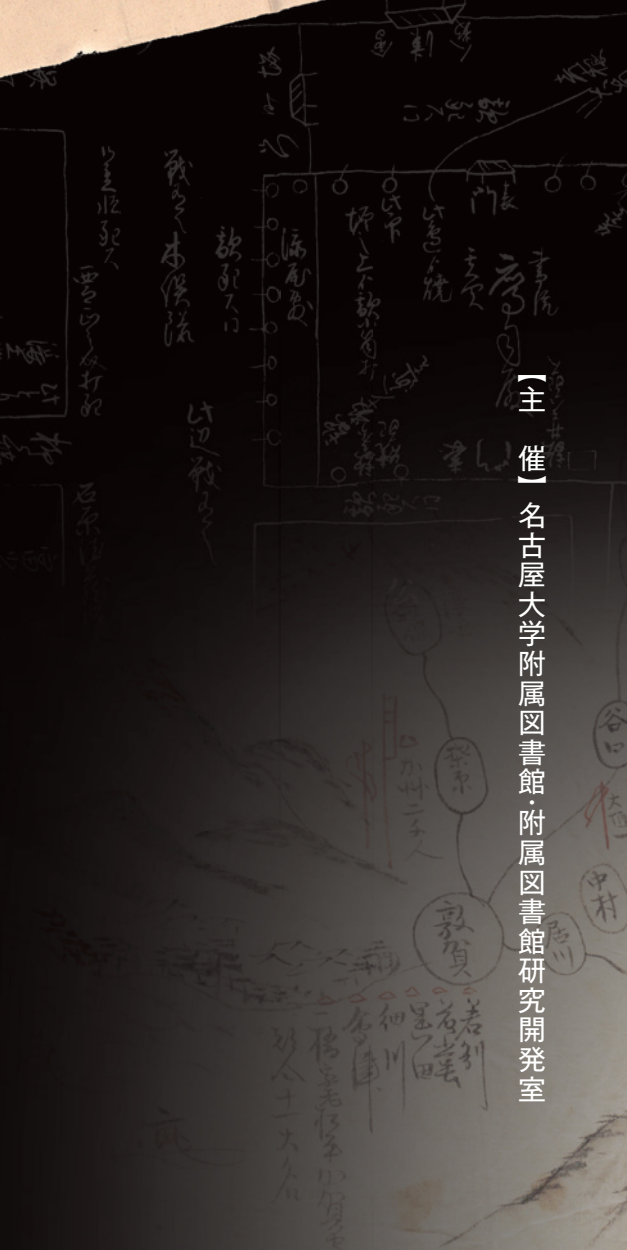
名古屋大学附属図書館2016年度秋季特別展（高木家文書展）

【主催】名古屋大学附属図書館 附属図書館研究開発室

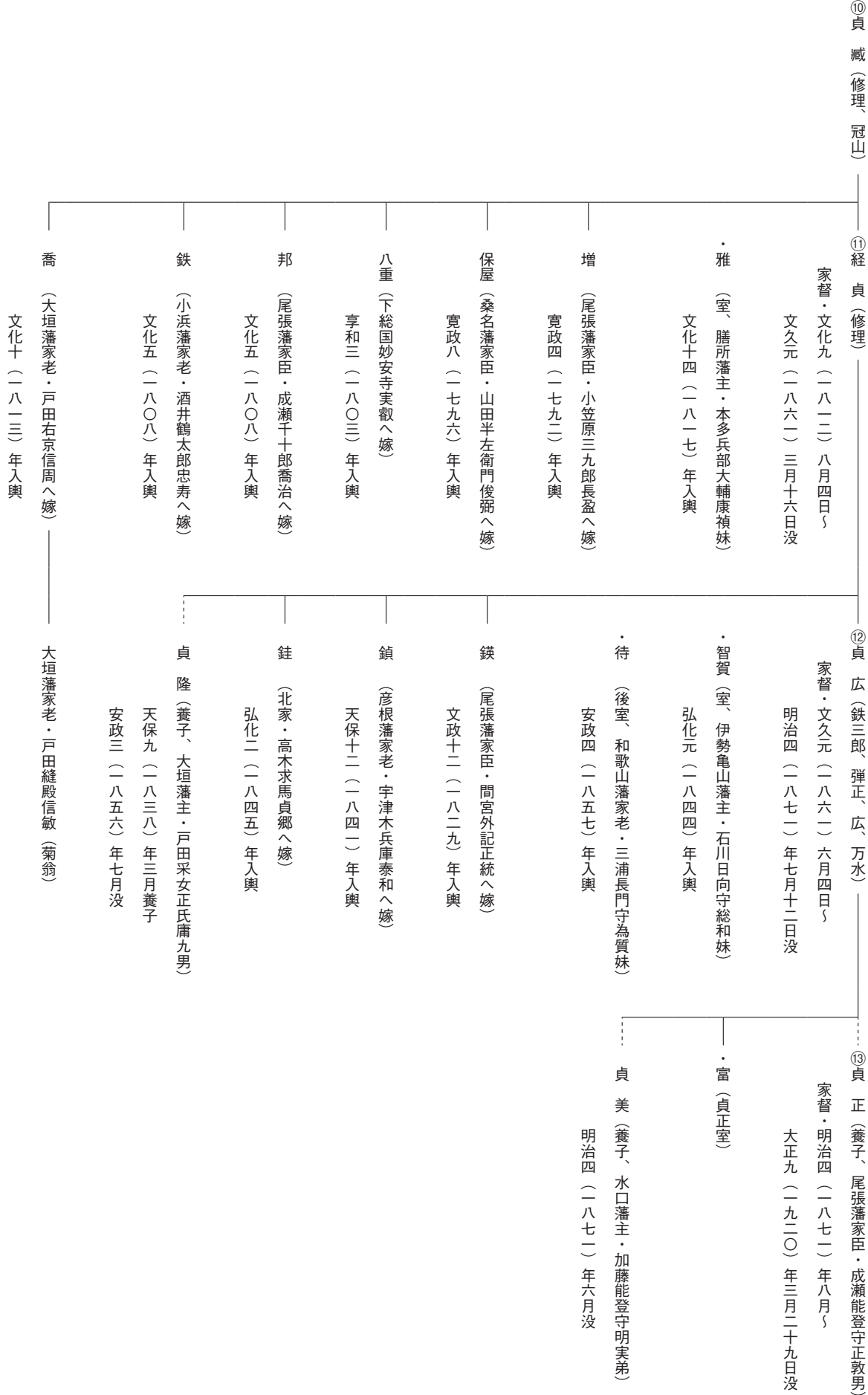
附年代之内
端方位度殿奉伺儀處伺之通
所下知相成儀趣從松山郡代
申越儀然心處私共在所之儀者
江間道之儀付園々原
兼而上方



尚方今之時勢精々取
仕居儀儀、市況儀漸進見廻り、
差出儀而為實地之取締者不相成候
奉存儀間何卒時多取雨郷之間道
取締之儀者私共江被



西高木家略系図



は じ め に

名古屋大学附属図書館が所蔵する高木家文書は、旧旗本・西高木家に伝来した10万点近くにのぼる一大古文書群です。

高木家は、本文書群を伝えた西高木家（2300石）のほか、東高木家（1000石）、北高木家（1000石）の三家からなり、一名「美濃衆」とも呼ばれ、江戸に常駐した一般の旗本とは異なり、知行地に在住して参勤交代をおこなう交代寄合の格式をもつ家柄でありました。関ヶ原合戦後に近江・伊勢と国境を接する美濃国石津郡時・多良両郷（現在の岐阜県大垣市上石津町域）に領地をあてがわれて以降、明治維新にいたるまで同地を支配しつづけ、その間、幕命により木曾三川流域を管理する「川通御用」の役儀を勤めたことで知られております。また、維新後も西高木家の当主は同地に居住し、学区取締や郡長・衆議院議員などの公職を歴任しました。

このため高木家文書には、全国的にも貴重な治水関係資料が豊富に存在するほか、旗本領主制の実態に迫る村方支配や家臣関係の資料、系譜・日記・書状・財政など家政に関する資料から維新以降の資料にいたるまで、多彩な内容の古文書・古記録・絵図類が伝わっております。

今回の特別展では、旗本家文書としては傑出した規模と内容を有する高木家文書の中から、幕末期の資料を取り上げ、旗本高木家が幕末において果たした役割を紹介いたします。

なお、本展を開催するにあたり、ご協力くださいました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

2016年10月15日 名古屋大学附属図書館長
同附属図書館研究開発室長
教授 森 仁志

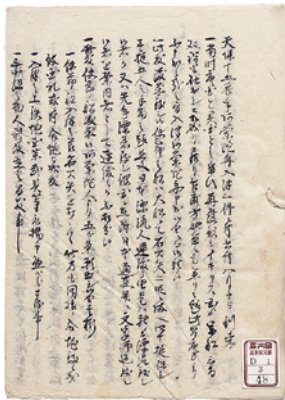
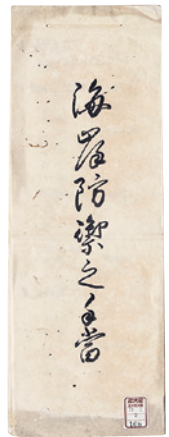
海防と高木家

内陸の旗本であった高木家も、近世後期の海防問題とは無関係ではいらなかった。

寛政期（18世紀末）以降、ロシア船をはじめとする異国船が列島沿岸に出没するようになると、幕府は蝦夷地や江戸湾の要衝警備に諸藩を動員するとともに、海防手当とその報告書の提出を命じた。はじめは沿岸諸藩のみが対象であったが、嘉永2（1849）年にはすべての大名・旗本が海防課役の対象となり、高木家も援兵編成の検討に迫られた。こうしたなかで嘉永6年6月のペリー来航を迎えるのである。

ペリー来航後は高木家においても海防名義の公儀拝借金を受け、また西洋流砲術の修行に乗り出すなど、武備充実につとめることになる。

海岸防禦之手当〈高木家文書〉



1 オランダ船入津一件につき書付

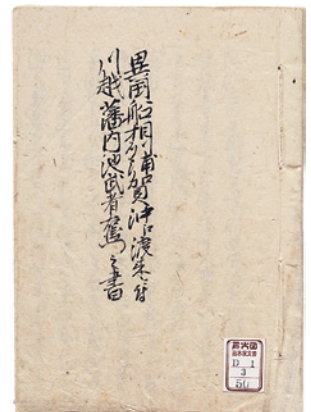
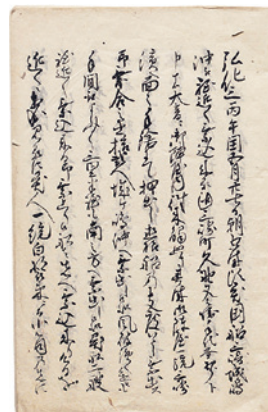
天保15(1844)年〈高木家文書〉

オランダ国王ウィレムⅡ世による開国勧告の国書と献上品を舶載したオランダ船が、天保15年に長崎へ入港したときの記録。松平定信の家臣であった桑名藩士の駒井乗郎が記した「甲辰阿蘭陀使節船一件」(『鶯宿雑記』巻564所収、国立国会図書館所蔵)に書き出しが類似するが、本資料の方が内容の豊かさや記述の正確さで優れている。

2 異国船相州浦賀沖江渡来ニ付川越藩内池武者右衛門之書

弘化3（1846）年〈高木家文書〉

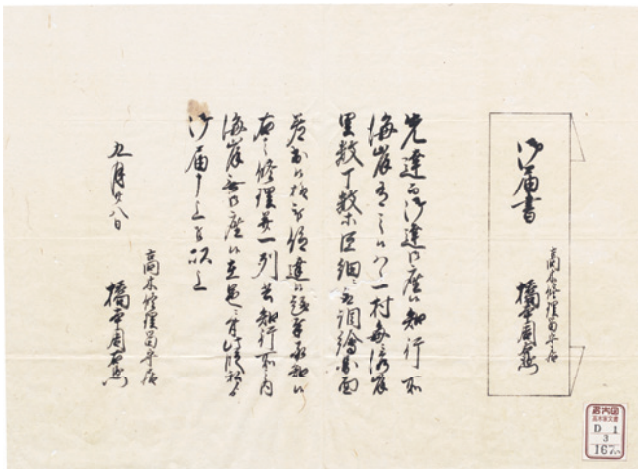
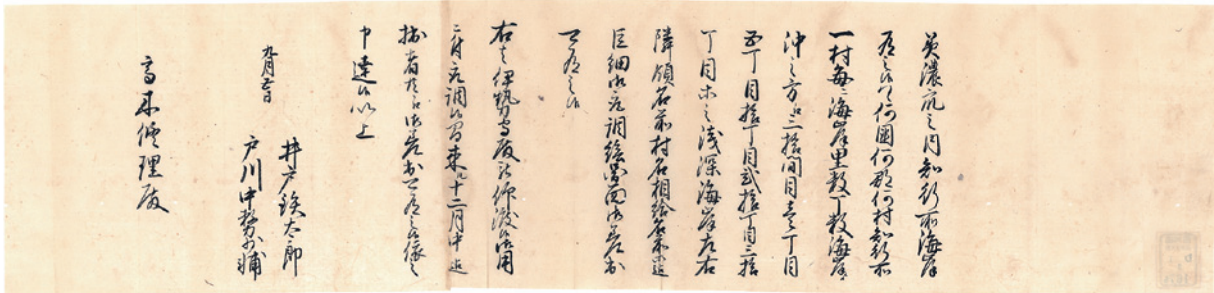
弘化3年閏5月、アメリカのビッドル艦隊が通商要求のため浦賀へ来航した。このとき沿岸警備の任にあたっていた川越藩士の内池武者右衛門は腕木の鎖をつたってアメリカ船に一番乗りを果たし、持参した「御船印」を掲げ、その後船員たちと交流をはかった。本資料はその様子を記したものであり、おそらく内池が著した『先登録』の写と思われる。



3 海岸調査につき達書および届書控

嘉永2(1849)年9月5日, 28日〈高木家文書〉

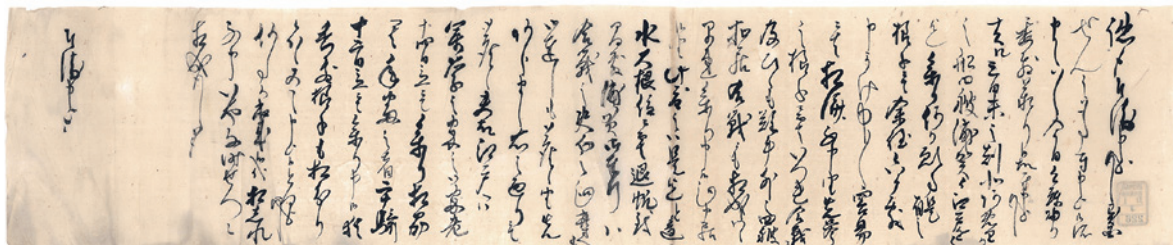
旗本の海防動員を念頭に出された幕府の海岸報告令とそれに対する高木家の報告書控。井戸と戸川は幕府目付、高木修理は西家11代経貞である。知行所に海岸のない高木家の回答は簡単な内容となっているが、この年の12月に幕府が全旗本も海防に動員することを宣言したことで、内陸旗本の高木家も海防問題と無関係ではいられなくなっていく。



4 アメリカ船浦賀沖来航につき書状

嘉永6(1853)年〈高木家文書〉

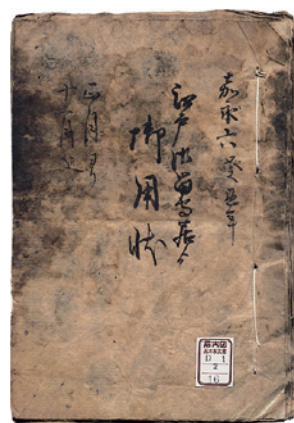
ペリー艦隊来航の様子を伝える書状。文中に「兵庫^{くわい}帰り委敷承り候」とあることから、彦根藩の宇津木兵庫泰和に嫁いだ高木経貞女^{むすめ}の書状と思われる。兵庫より聞いた話として「今回の来航はこれまでとは違い、水や大根を与えるぐらいではとても退散しないでしょう。浦賀奉行は合戦を決心している様子です」と、緊迫した現地の情勢を書き綴っている。



5 ペリー退帆につき江戸留守居の御用状

嘉永6(1853)年6月17日〈高木家文書〉

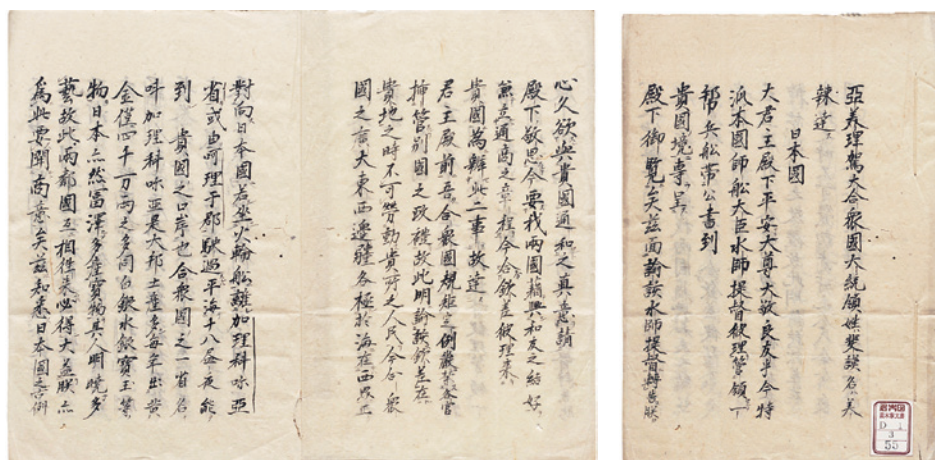
ペリー艦隊が嘉永6年6月12日に退帆した直後に認められた江戸留守居の御用状。国許に向けて早急に具足・鎗・鉄炮・玉薬などを準備することを促している。13日に幕府から「非常手当之儀者銘々心弛ミ之筋無之可被致候」との触書（「別紙御触面」）が出ており、旗本・御家人までも「御固」に動員されることが現実味を帯び、狼狽している様子が伝わってくる。



6 アメリカ大統領国書・ペリー書翰写

嘉永6(1853)年7月17日借写〈高木家文書〉

アメリカ大統領フィルモアから徳川將軍に宛てた親書と全権委任状およびペリー提督が認めた書翰3通の漢訳本文の写。高木家の江戸留守居が7月17日に借用して写し取ったものである。国書の授受は6月9日に久里浜でおこなわれた。



7 御請書（アメリカ大統領国書につき意見書下書） 嘉永6（1853）年〈高木家文書〉

国書を受理した幕府は、嘉永6年7月に大名・旗本などへ広く意見を諮詢した。本資料は、それに対する意見書の下書と思われる。要求に応えることは困難であること、有事に備えるため安房・相模・下総の要地に城を築くこと、参勤交代を3年に1回に緩和すること、オランダに軍艦を注文することなど、軍備の充実と諸大名の負担緩和を主張している。



8 異国船渡来につき武備手当のため公儀拝借金受取証下書

嘉永6（1853）年12月26日〈高木家文書〉

異国船の渡来により、嘉永6年9月に幕府は旗本・御家人に対して海防名義の拝借金を許した。これを受けて2300石の西高木家は100両を受け取っている。当初は10ヶ年賦返済の約定であったが、後に返済は免除され、代わりに洋式軍備の拡充を命ぜられた。



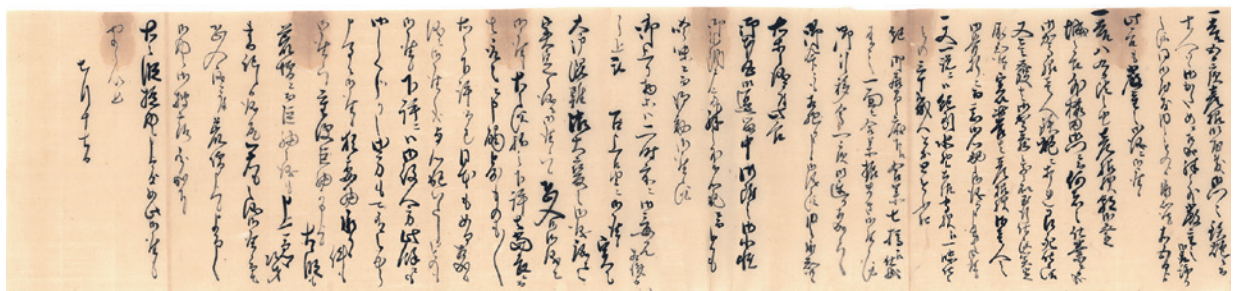
9 安政の五ヶ国条約写 安政5(1858)年〈高木家文書〉

安政5年6月19日、幕府はアメリカとの間に修好通商条約並貿易章程を締結した。つづいて、7月10日にオランダ、11日にロシア、18日にイギリス、9月3日にフランスと同様の条約を結んだ。高木家文書には五ヶ国と締結した条約書の写がすべて揃っている。江戸留守居の三輪武左衛門が入手し、国許へ送ったものである。



10 将軍継嗣問題等につき江戸留守居の書状 安政5(1858)年7月17日〈高木家文書〉

将軍継嗣をめぐる幕府の「大御混雑」を国許へ「極内々」に伝えた江戸留守居・三輪武左衛門の書状。一橋派の徳川齊昭・松平慶永などの処罰、将軍医師の閉門、奥右筆の変死、彦根藩邸の守衛強化、後の桜田門外の変を思わせる発砲事件、江戸城内の不穏な様子など、真偽不明のものも含め江戸表の風聞を書き記している。

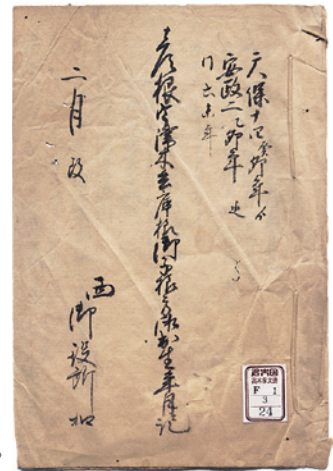


彦根藩と高木家

幕末の大老・井伊直弼を輩出した彦根藩は高木家にとっては領地を接する隣国であった。また、文久元(1861)年に家督を継いだ高木貞広の妹^こ鎮が、彦根藩の家老役を代々務めた宇津木治部右衛門家(2500石)の10代目となる兵庫泰和に嫁いでいた。それゆえ、安政の大獄や桜田門外の変は高木家にとっても他人事ではなかったようで、多くの関係資料が残っている。

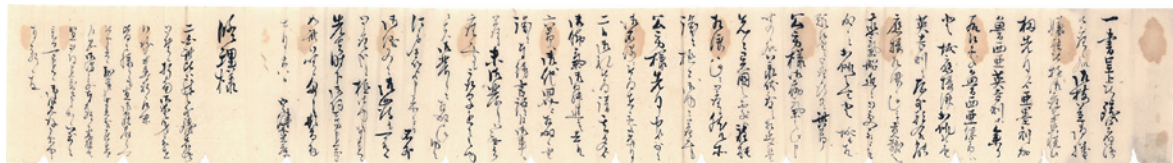
高木貞広の義弟となる宇津木兵庫は、文久2年から家老を務め、幕末の江戸・彦根・京都を奔走し、禁門の変や長州征討、天狗党鎮圧に関係した。真正は、こうした中央政局の情報を、義弟の兵庫や妹鎮から得ていたのである。

彦根宇津木兵庫様御子様方御出生年月記〈高木家文書〉



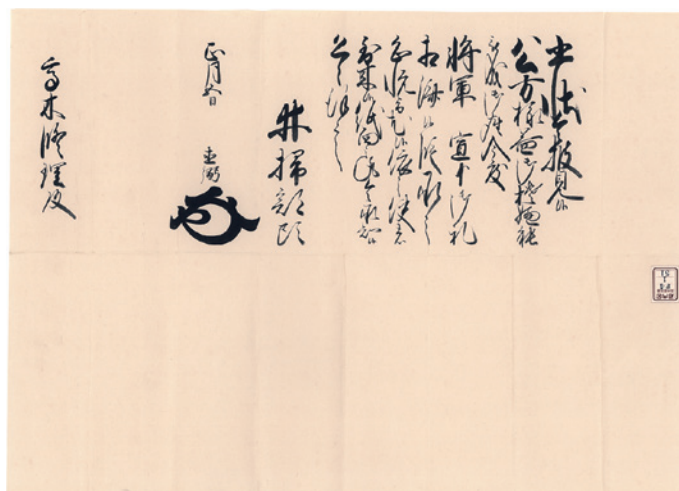
11 将軍他界につき宇津木兵庫の書状 安政5(1858)年7月28日〈高木家文書〉

彦根藩士の宇津木兵庫(当時在国)が岳父の高木修理経貞に宛てた書状。前半でアメリカなどとの交渉の様子を記した後、江戸表より届いた話として、将軍家定が当月6日に他界したことを「極々御内々」に伝える。幕府が将軍の喪を発表するのは8月8日であり、それよりも早く高木家は彦根藩を通じて情報を入手していたのである。



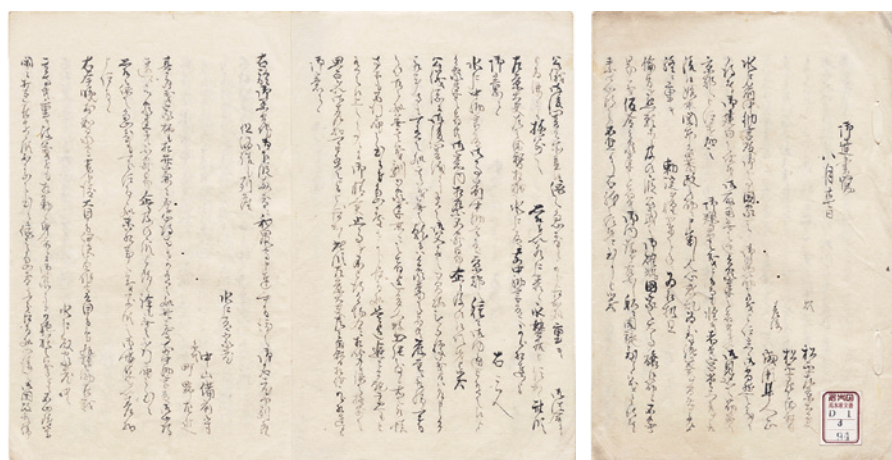
12 将軍宣下礼につき大老奉書 安政6(1859)年正月5日〈高木家文書〉

安政5年10月25日、徳川家茂は将軍宣下を受け第14代将軍となった。本資料は、将軍宣下への礼が済んだことを承り、祝儀を申し上げた高木修理経貞からの呈書に対し、将軍が承知したことを伝える大老井伊直弼の奉書である。大老奉書とは、大老が将軍の意を奉じて発給する伝達文書のことである。



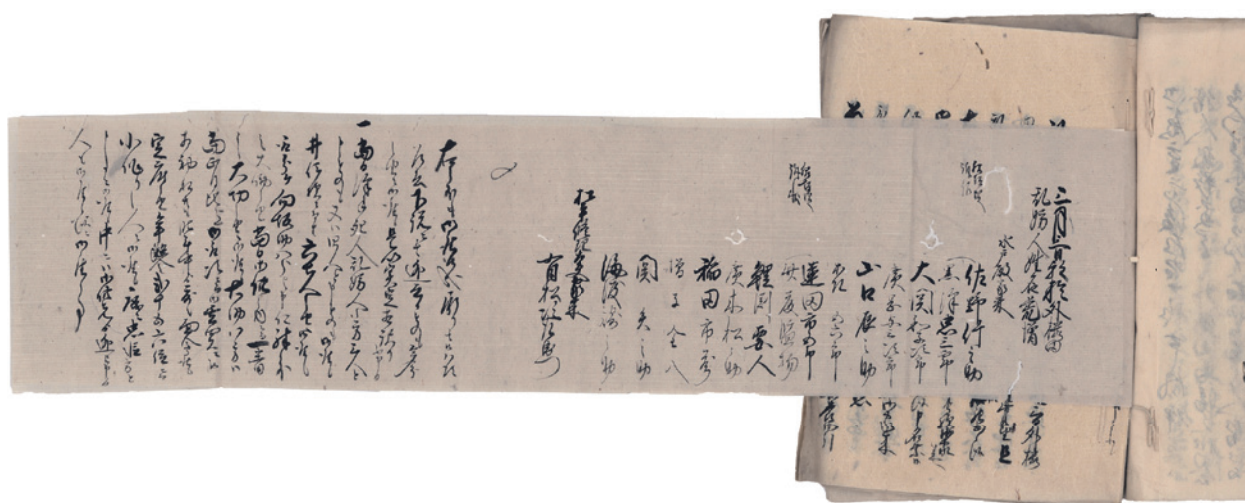
13 御達書写（安政の大獄における処罰申渡書写） 安政6（1859）年8月27日〈高木家文書〉

朝廷の許可なしに通商条約を締結したことで幕府に対する批判が沸騰するなか、大老井伊直弼は反対派の弾圧を決意し、多くの志士を逮捕した。逮捕した者に対する評定所の断罪は安政6年8月から10月にかけておこなわれ、水戸藩関係者から処罰されていった。本資料は、8月27日の水戸藩関係者に対する断罪書の写である。



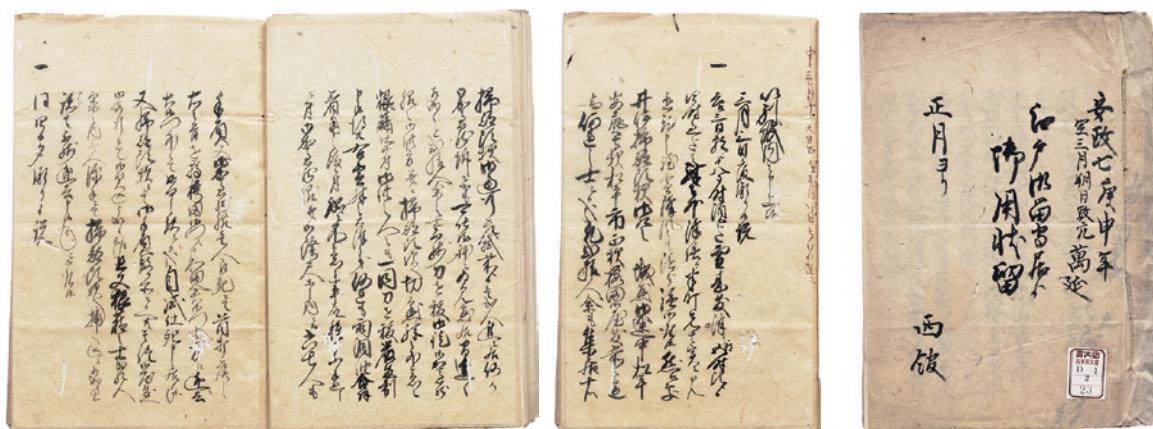
14 三月三日朝於外桜田乱妨人姓名荒増 万延元(1860)年3月〈高木家文書〉

安政の大獄で過酷な弾圧を受けた水戸藩の浪士が中心となり、万延元年3月3日、大老井伊直弼を桜田門外において襲撃した。本資料には、桜田門外の変における襲撃者15人の姓名が記されているが、実際の襲撃者は18人であり、また姓名に誤字もみられる。後半では高木家とも面識のあった直弼御供の向坂助八郎の働きを賞賛している。



15 桜田門外の変につき江戸留守居の御用状 万延元(1860)年3月8日夜認〈高木家文書〉

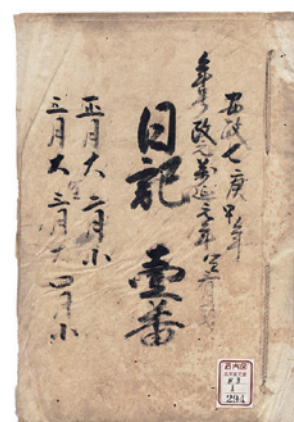
江戸留守居の三輪武左衛門が国許へ報じた桜田門外の変の第一報である。井伊直弼は浪士たちに討たれて首級を持ち去られていたが、三輪が得た情報では、持ち去られた首級は駕籠脇の者で大老は存命とあった。御用状は4日、6日、8日にそれぞれ入手した情報にもとづいていたが、三輪自身が述べているように事件に関する情報はかなり錯綜していた。



16 御用日記（彦根宇津木兵庫方へ使者派遣）

万延元(1860)年3月13日条〈高木家文書〉

井伊直弼襲撃の情報は関ヶ原宿経由で3月10日には多良の高木家に伝わっていた。事件を伝え聞いた高木経貞は、安否確認と見舞いのため、早速翌日に家臣の大嶽弁之丞を彦根の宇津木兵庫のもとへ遣わした。すでに関ヶ原宿では大老「殺害」が噂になっていたが、兵庫は江戸からの知らせとして「カスリ疵」を煩っただけと答えている。

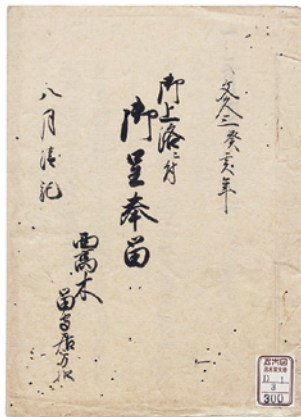
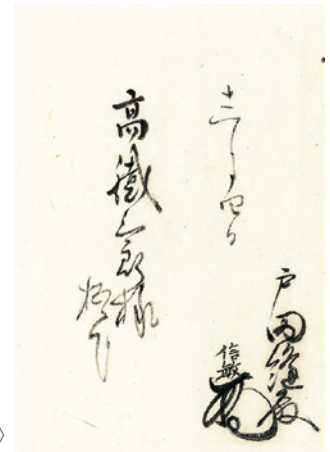


幕末の大垣藩と高木家

大垣藩は中山道の要衝にあつて和宮降嫁にともなう道中警備や將軍上洛に際しての警衛をつとめ、元治元(1864)年の禁門の変では伏見において長州勢を駆逐し天皇や將軍から褒賞を賜っている。その後も天狗党の西上を防ぎ、長州征討では將軍に従って出兵した。

このように幕末政治に深く関係した大垣藩に、高木家はたびたび家臣を派遣して政治情勢や対応策を問い合わせていた。高木家と大垣藩主戸田家とは以前から交流があったが、幕末においては大垣藩筆頭家老の戸田縫殿信敏(菊翁、2000石)が高木経貞妹を母にもち、高木貞広と従兄弟の間柄であったことが、高木家が行動を定めるにあたつて大きな意味をもった。

戸田縫殿信敏書状〈高木家文書〉



17 御上洛二付御呈奉留 文久3(1863)年8月清記〈高木家文書〉

文久年間になると政局の中心は京に移り、文久3年3月には將軍家茂が上洛した。本資料は、將軍の上洛決定、江戸出御、二条着城、参内、江戸還御に際して高木家が授受した祝儀呈書および奉書を写した留書である。

18 見聞録 六(八月十八日一件風聞略記) 文久3(1863)年〈高木家文書〉

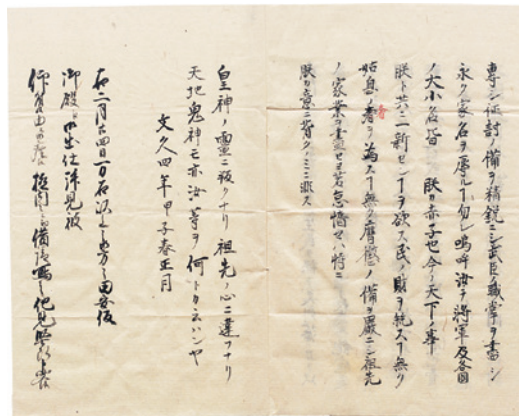
文久3年正月から9月頃までの京都情勢や長州についての風聞、勅書や達書・沙汰書、落首・張紙、書翰などを収める。展示箇所は、薩摩・会津両藩を中心とした公武合体派が尊攘派の長州藩と公家を京から追放した八月十八日政変の「風聞略記」である。



19 将軍家茂への宸翰写

文久4(1864)年正月〈高木家文書〉

再上洛した将軍家茂が賜った文久4年正月27日の宸翰写。長州・三条実美らの必罰、武備の充実、天下の一新を内容とする。2月24日に万石以上の大名にのみ披露されたが、旗本の高木家は「極内々」に借り受けて写し取った。



20 七月十八日伏見御固メ場防戦之節御届面

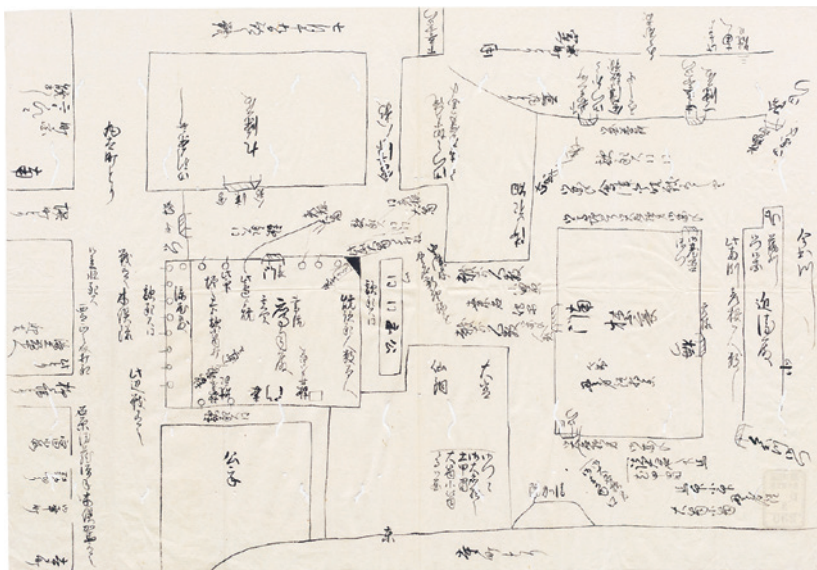
元治元(1864)年7月20日〈高木家文書〉

禁門の変前日、元治元年7月18日夜に伏見街道を警備していた大垣藩兵と京へ向かおうとする長州藩兵が衝突した。本資料は、長州藩兵を撃退した大垣藩の報告書写である。末尾には大垣藩の功績に対する一橋慶喜の感状写を収める。



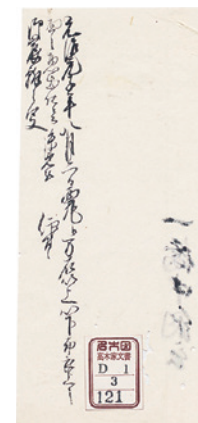
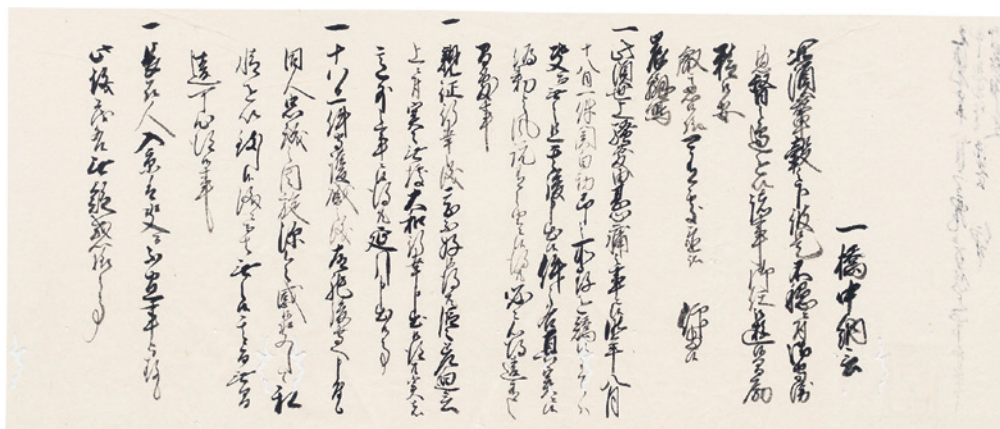
21 禁門の変図解 元治元(1864)年7月〈高木家文書〉

京における失地回復をはかった長州藩は軍事行動を起こし、元治元年7月19日、御所を守る薩摩・会津らの諸藩兵と戦闘になった。戦いは一日で終結し、長州藩の大敗に終わった。本資料は、戦闘となった19日朝の御所の様子を説明した図解である。



22 一橋慶喜への宸翰写 元治元(1864)年8月2日写〈高木家文書〉

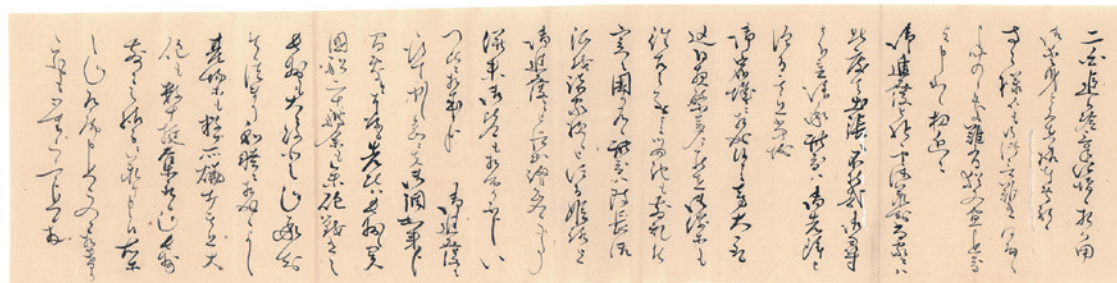
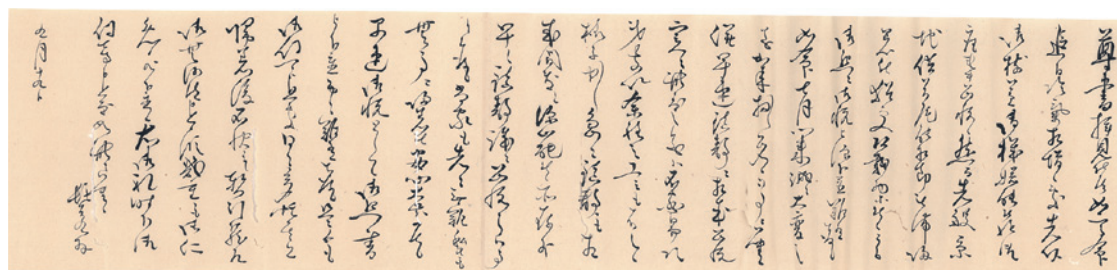
長州藩の処分について一任された一橋慶喜が、元治元年6月29日に賜った宸翰写。前年の八月十八日政変の正当性を改めて述べたもので、将軍家茂は8月2日にこの宸翰を大名・旗本に示して、長州征討のため進発することを宣言する。



23 京地供勤めに対する頂戴物の礼等につき宇津木兵庫の書状

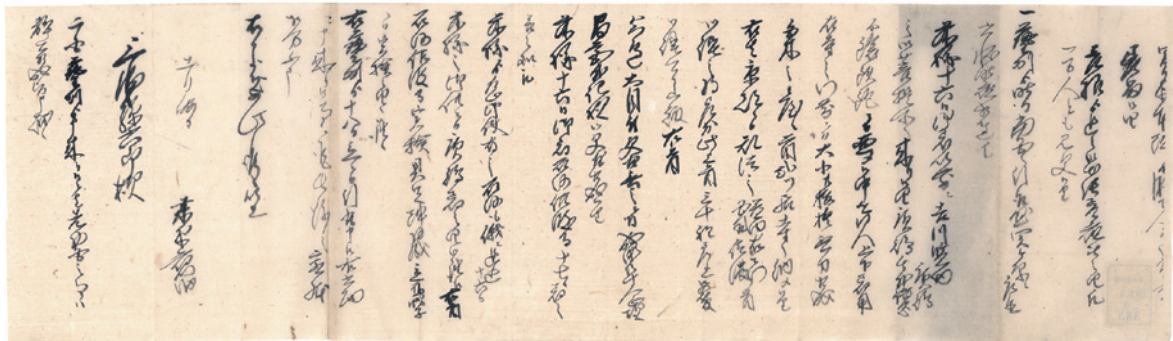
元治元(1864)年9月19日〈高木家文書〉

彦根藩家老の宇津木兵庫が義兄の高木貞広（弾正）に宛てた礼状。禁門の変が存外早く鎮静し無事帰着したことを報告した後、追伸で長州征討に先鋒を仰せ付けられ、そのうえ将軍が宿城することになり大取込み中であること、四国連合艦隊の砲撃をうけ長州が敗北したことなどが述べられている。



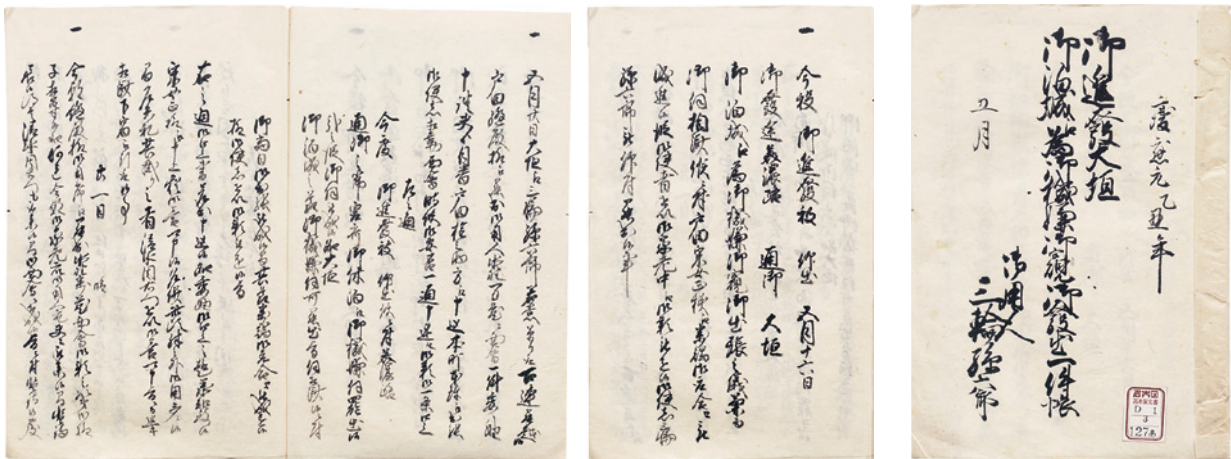
24 芸州の様子につき桑原応助の書状 元治元(1864)年11月晦日〈高木家文書〉

桑原応助は高木家の知行所に接する一之瀬村（尾張藩領石河氏給地）の庄屋、三輪孫六郎は西高木家の家臣である。長州が家老の首級を広島府の征長総督府に差し出し謝罪恭順の意を示した様子を伝える。成瀬・間宮・石河など尾張藩士の動向が記述の中心となっている。桑原はこの他にも尾張藩の動向を伝える書状を三輪に送り、情報を提供していた。



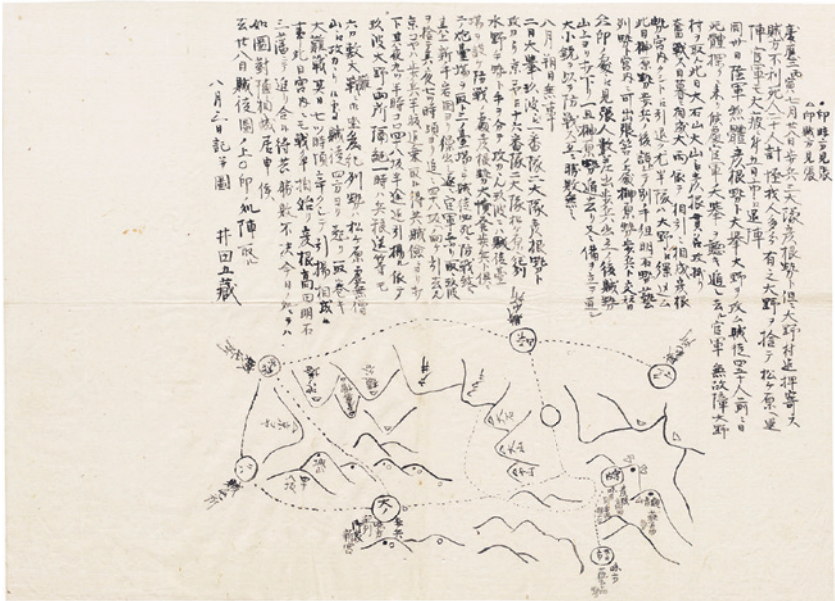
25 御進発大垣御泊城江為御機嫌御窺御発出一件帳 慶応元(1865)年5月〈高木家文書〉

長州再征のため將軍家茂は慶応元年5月16日に江戸城を出陣し、東海道から美濃路を西上して閏5月13日に大垣で泊城した。このとき高木貞広は將軍へ御機嫌伺いのため大垣城に登營するが、これに先立ち高木家では大垣藩家老の戸田縫殿を通じて取りなしを依頼していた。高木貞広と戸田縫殿は縁戚関係にあったため、こうした周旋活動が可能だったのである。



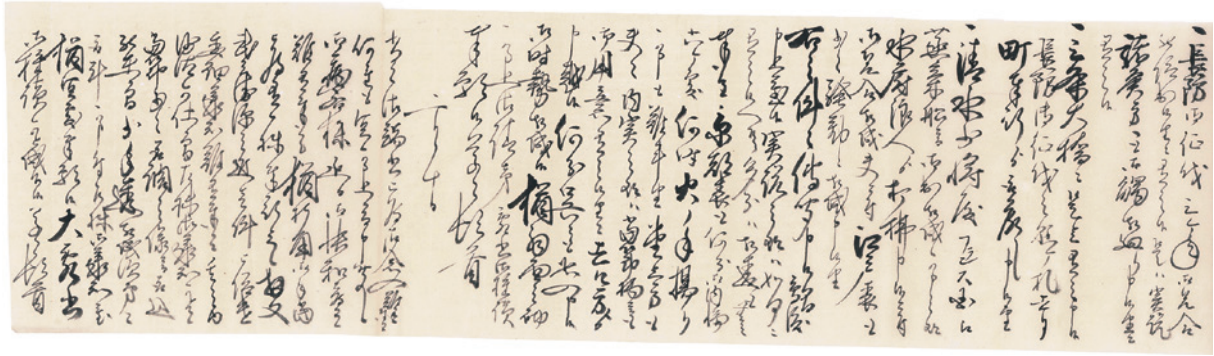
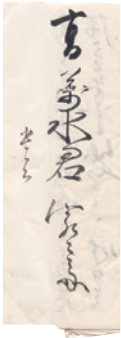
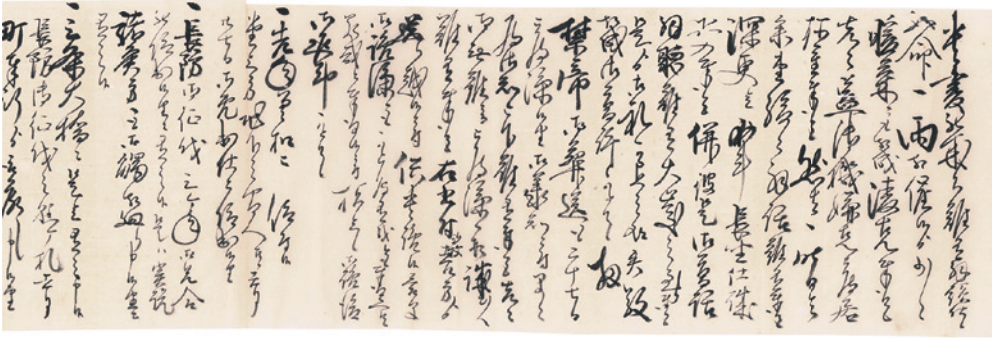
26 第二次長州征討の芸州口戦闘記録 慶応2(1866)年8月3日〈高木家文書〉

大垣藩士の井田五蔵（譲）による第二次長州征討の記録図。芸州口の大野村・玖波村の戦いについて、7月28日から8月2日までの経過と対陣図が描かれている。図中の「大ノ」が大野、「クハ」が玖波、「賊」は長州藩を指している。広島には征長先鋒総督府が置かれ、現在の広島県西部で激しい戦闘が繰り返された。



27 天皇葬送等につき高木貞栄の書状 慶応3(1867)年2月10日〈高木家文書〉

北高木家の高木貞栄（容々斎）が西高木家の高木貞貞（万水）に宛てた書状。孝明天皇の葬送が済み、控の公家が有免されたこと、長州征討が3ヶ年見合わせとなり、三条大橋の「長防御征伐」の掛札が撤去されたことなど、伝え聞いた風説を記す。京都もいつ「火ノ手」があがるかわからないと不安を募らせている。



28 御用日記（神仏の御札降り） 慶応3（1867）年10月13日条〈高木家文書〉

9月以来、三河・尾張・美濃にかけて伊勢や稲荷・秋葉などの御札降りがみられ、10月12日には多良郷上原村にも2枚の御札が降ったことが記されている。2枚は多賀大明神と江州木之本村の地藏尊の御札であった。豊作の年柄であると喜ぶ姿がみられた一方で、御札降りを長州の件と結びつけて「何等之仕態」と疑う向きもあった。



29 御用日記（戸田縫殿を訪問） 慶応4（1868）年正月26日条〈高木家文書〉

王政復古後の高木家は、当初は旧幕府に従う方針であったが、その一方で高木貞広は正月26日早朝にお忍びで親戚筋の大垣藩家老戸田縫殿を訪れ、相談に及んだ。さらに28日には大垣藩の藩論を勤王に導いた小原鉄心へ家臣を派遣し、助言を得ている。こうしたこともあり高木家は方針を修正し、2月4日に三家そろって東山道鎮撫総督へ拝謁、さらに16日には上京・参内して新政府へ帰順の意を示すことになる。



高木家と間道守衛

関ヶ原合戦後、高木三家が美濃国石津郡時・多良郷の地に知行替えとなった理由の一つに、この地が伊勢から関ヶ原に通じる間道要地に位置したことがあげられる。高木家も間道取締を自家の由緒として語っていた。

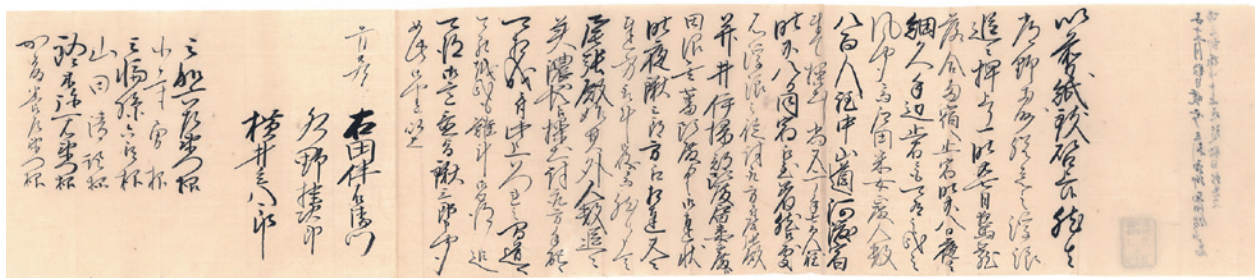
幕末における尊攘派浪士の決起や將軍上洛は間道取締の重要性を高めた。なかでも元治元(1864)年の天狗党の乱では、西上する天狗党が美濃を通過することが予想されたため、高木家では伊勢街道の下多良から一之瀬に抜ける勝地峠に番所を設置して取締を強化するとともに、西洋小銃を導入した軍陣で備えた。勝地峠の警固(勝地固め)は戊辰戦争が終結するまで続けられることになる。

勝地番所跡碑



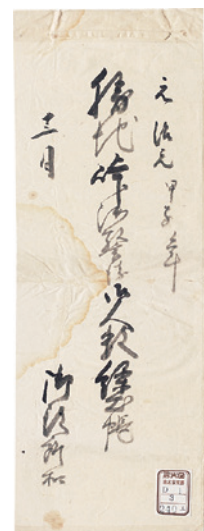
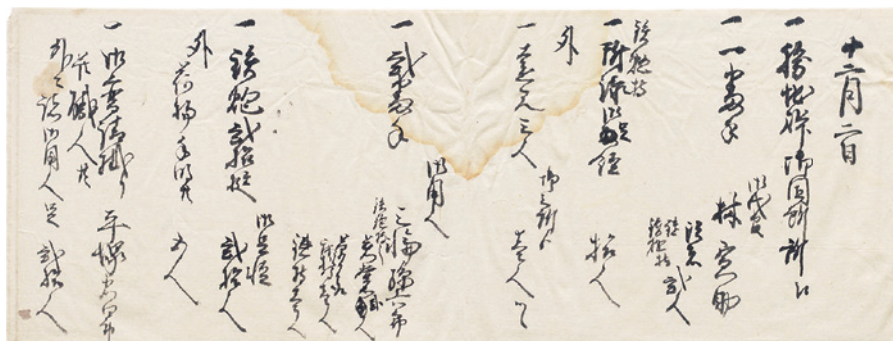
30 浮浪の徒討取方につき笠松陣屋堤方役の書状 元治元(1864)年11月29日〈高木家文書〉

元治元年3月に筑波山に挙兵した水戸藩の尊攘激派(天狗党)は、幕府追討軍と交戦となり10月末に多くが投降するも、一部の勢力が武田耕雲斎を将として京を目指し中山道を西上した。本資料は、大垣・彦根・尾張などの諸藩が美濃に出兵し天狗党の討取方を手配していることを受けて、笠松陣屋の堤方役が間道を注意するよう高木家に促した書状である。



31 勝地峠御警衛御人数繰出帳 元治元(1864)年12月〈高木家文書〉

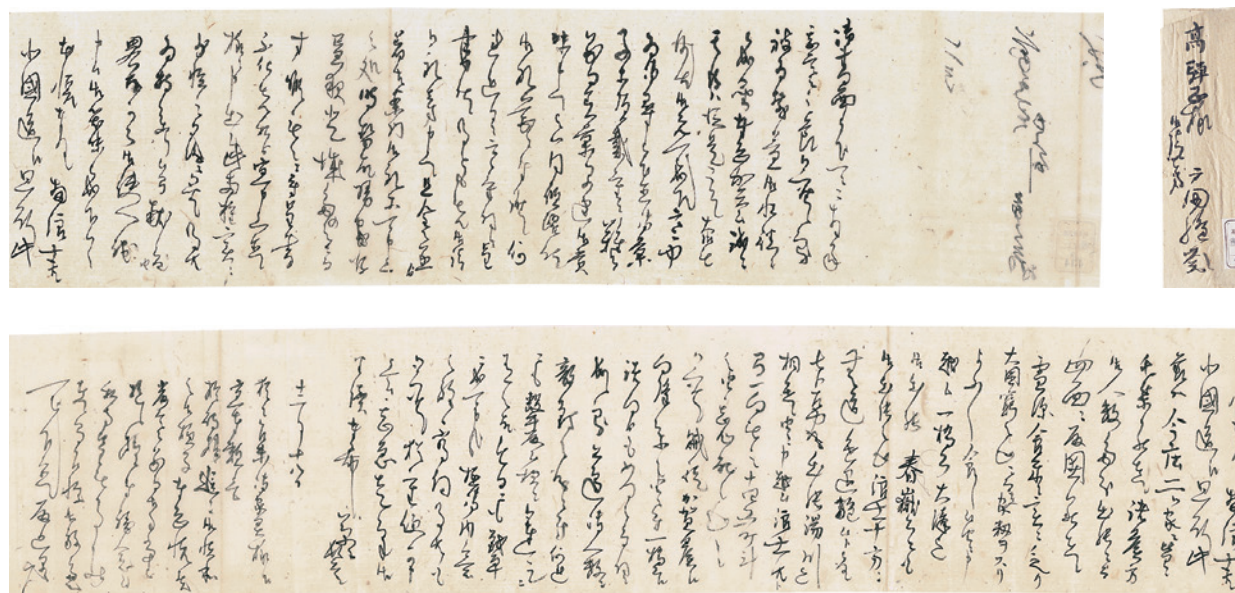
天狗党の西上に対して高木家は伊勢街道の要所である勝地峠に番所を設け、足軽数十人と鉄炮を配備し昼夜警戒にあたった。ただし、天狗党は大垣・彦根などの諸藩に前途をふさがれて揖斐から北上し越前に向かったため、高木家の知行所に現れることはなかった。



高木家では、天狗党の西上に対して間道を守衛するだけでなく、非常の場合には出兵することも想定し部隊編成に着手していた。総人数80人のなかには士分・卒分40人のほか農兵の存在も確認できる。また西洋小銃が10挺も導入されている。



天狗党は元治元年12月17日に越前新保において加賀藩に投降した。大垣藩家老戸田縫殿が高木貞広（弾正）に宛てた書状には、降参する「賊徒」に対し一橋慶喜が「撃取」の姿勢をみせたため、今日にも戦争になるかもしれないと緊迫した状況が綴られている。



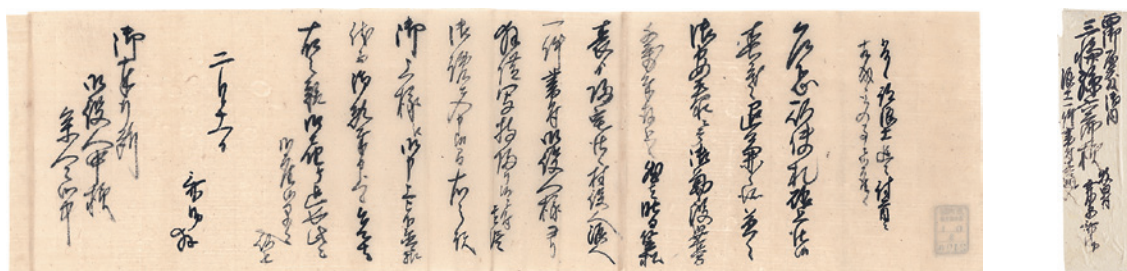
34 天狗党包囲絵図 元治元(1864)年12月〈高木家文書〉

「新保」に「●浪士」とあるのが天狗党。それを大垣や彦根・越前・加賀などの諸藩が取り囲む。「海津」に一橋慶喜の本陣がみえることから、12月16日に海津に到着した一橋慶喜が、翌日を総攻撃の日として各藩を配したときの絵図と思われる。



35 浪人一件書付写を届けるにつき桑原斎助の書状 元治2(1865)年2月11日〈高木家文書〉

降伏した天狗党のうち武田耕雲斎（伊賀）ら352人が死罪に処せられた。2月朔日の吟味結果を記した本資料は、美濃郡代岩田鉄三郎の手代が記したものを牧田村の村役人が笠松で写し取り持ち帰った。高木家に届け出た桑原斎助は牧田村年寄と思われる。



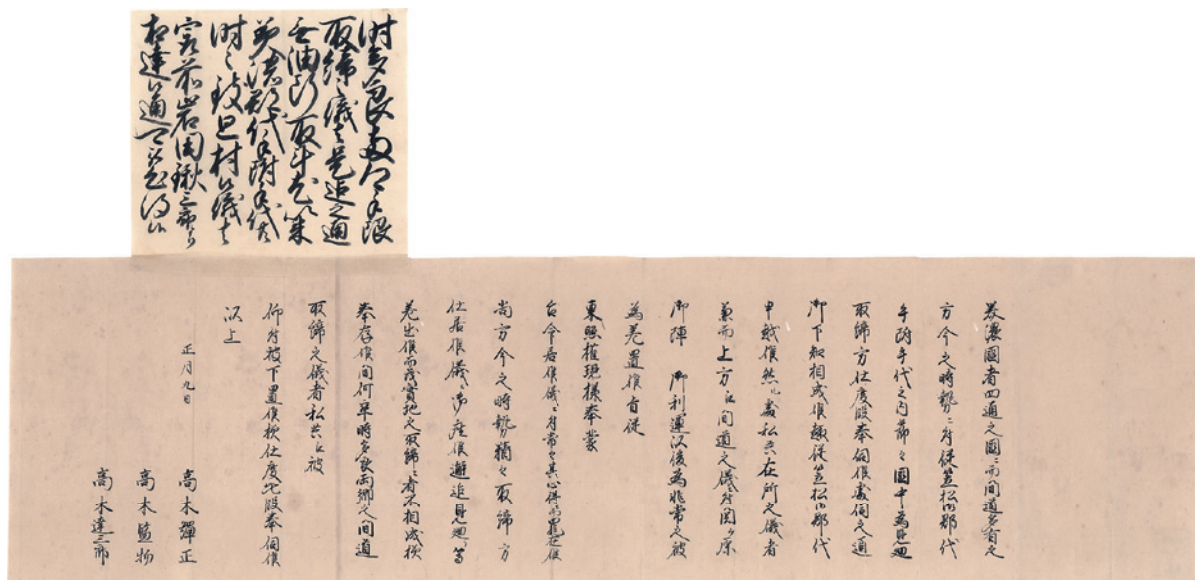
36 浪士取締の仮木戸につき届書 元治2(1865)年3月18日〈高木家文書〉

天狗党の西上に際して高木家が領地境に設けた仮木戸を、天狗党降伏以降も取り締まりのため当然そのまま建て置くことを幕府用番へ届けた書付控。高木家が、上方への間道にあたる在所の治安維持を継続していたことがわかる。



37 時・多良両郷の間道取締につき伺書 慶応3(1867)年正月9日〈高木家文書〉

美濃郡代が幕領・私領の区別なく手付・手代を派遣して国中を見廻らせる旨を通知してきたことに対し、高木三家が自領内の間道取締は従来どおり自分支配にすべきことを伺い出た書付。家康以来の自家の由緒として間道取締を主張している。



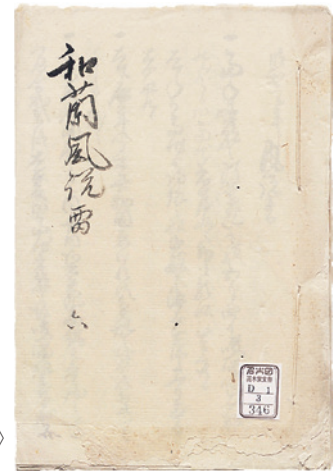
高木家と幕末情報

高木家文書には、幕末のさまざまな情報を書き留めた風説留が数多く伝わっており、これらの資料は高木家の活動のみならず、幕末社会を考える上でも貴重な資料となっている。

資料には諸侯や藩士、公卿、新選組などの建白書、江戸や京都・長州の情勢など実に多様な情報が書き留められており、めまぐるしく変化する幕末政治に対応するため、高木家が様々なルートを駆使して情報を収集し記録していたことがわかる。

また、オランダ風説書や異国船の渡来記、幕府が欧米諸国と締結した条約書、海外新聞を書写したものもあり、高木家が海外情報の受容にも積極的であったことがうかがえる。

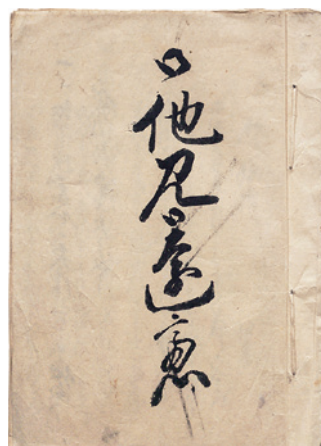
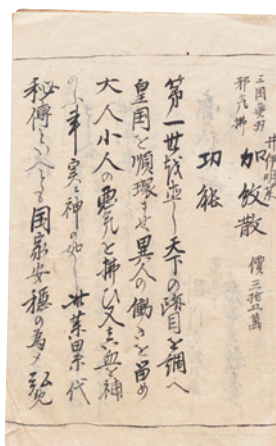
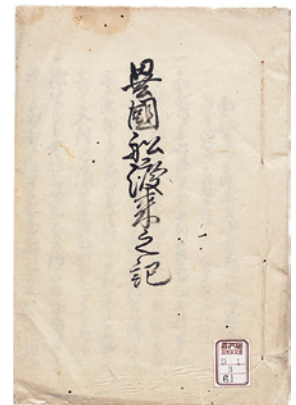
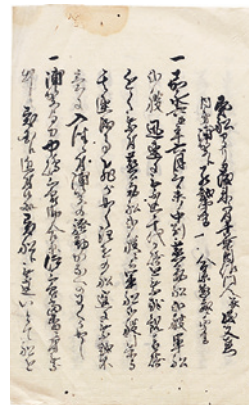
和蘭風説留〈高木家文書〉



38 異国船渡来之記

嘉永6(1853)年〈高木家文書〉

ペリー来航について、浦賀奉行支配組与力・合原惣蔵、飯塚久米三郎、樋口関三郎（樋田多太郎の間違いか）、応接掛・香山栄左衛門、近藤良次の聞書。5人の聞書は「深秘ニ付不免他見」とあったが、実際にはかなり流布したようで、高木家も入手していた。



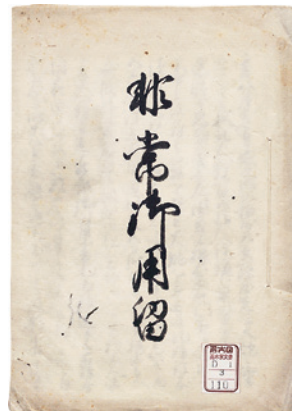
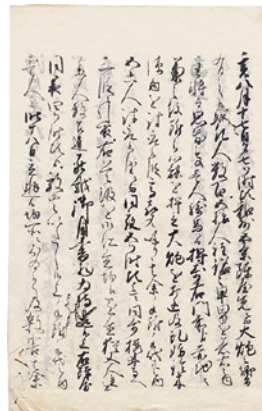
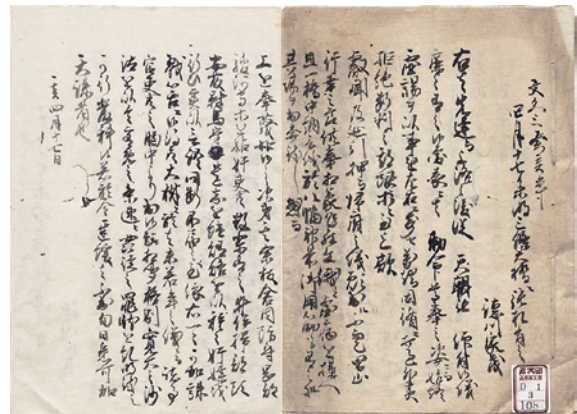
39 御他見御遠慮（江戸表風聞書付）

安政5(1858)年〈高木家文書〉

安政5年中の江戸におけるコレラ流行、条約締結問題、将軍継嗣問題をめぐる風聞や風刺を書き記す。伊右衛門という人物が姉に送った書付のようで、女中が集まって笑談しているような内容と断っている。

40 三条大橋張札写

文久3～元治元(1863～64)年〈高木家文書〉
京の三条大橋に張り出された張札などを写し取った書付。文久3年4月17日の張札は、將軍家茂に対して、孝明天皇の石清水行幸に供奉しなかったことを糾弾し、「姦徒」を厳科に処さなければ、ことごとく「天誅」を加えると脅迫している。

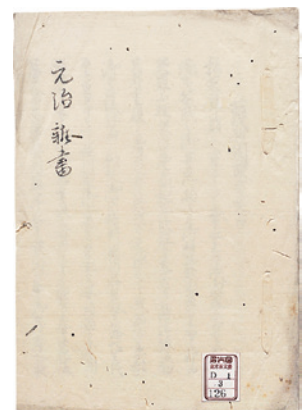
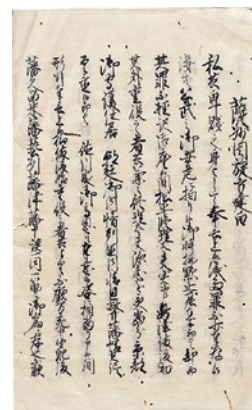


41 非常御用留（天誅組の変）

文久3(1863)年8月〈高木家文書〉
尊攘激派の吉村寅太郎・松本奎堂・藤本鉄石が中心となり、中山忠光を擁して大和で挙兵した天誅組の変についての御用留。8月17日の五条代官所襲撃事件をはじめとする8月中の動向を報告した注進状写などからなる。

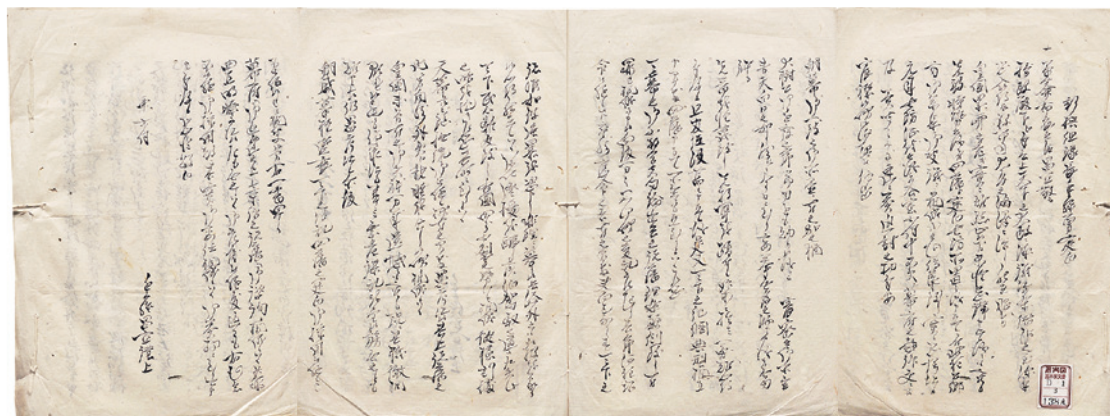
42 元治雑書

元治元(1864)年〈高木家文書〉
元治元年中の「薩州周旋方建白」(10月)、「英方長州江贈来書簡写」(陽暦6月)、備後福山藩が藩校の学頭らを岩国に派遣して事情を探索させた「防長事情」(8月)、「英国人豊後姫島江差出候書簡」の4通からなる。



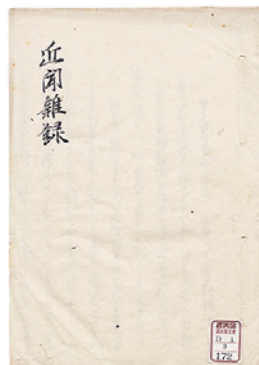
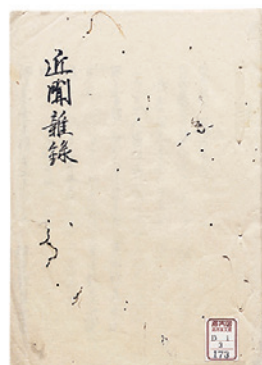
43 新撰組隊長近藤勇建白 慶応3（1867）年6月〈高木家文書〉

松平春嶽・島津久光・山内容堂・伊達宗城の四侯が提出した、長州への寛大処分を優先課題とする建白書（「四藩を建白長防所置之儀申立候」）に対して、近藤勇が批判した上書の写である。慶応2,3年の風説や建白書を書き写した風説留綴のなかの一冊として伝わる。



44 近聞雑録 安政～慶応（1854～68）〈高木家文書〉

国内外の諸情報を整理した風説留。18冊が伝わっており、「近聞雑録」もしくは「近聞雑記」と称している。幕府・諸藩・朝廷・海外勢力の動向や意見書、海外新聞の抜粋、事件・騒動に関する風聞などを収める。



近 聞 雑 録

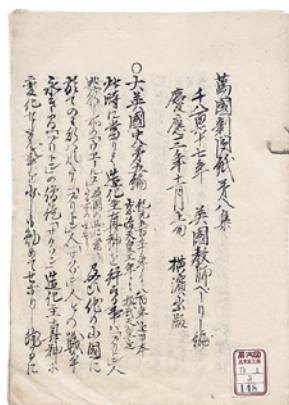
請求番号	主な内容
D-1-(3)-172	下関事件後の長州藩重役と外国艦隊との談判（『日本貿易新聞』第76号附録の抜粋） 天狗党鎮定の際に「不屈」を働いた宍戸藩主松平頼徳への処罰（元治元年10月） 松平容保を誠忠と称える大坂天神橋に掲げられた貼紙の内容（慶応元年正月11日）
D-1-(3)-173	四国連合艦隊による兵庫開港要求事件についての風聞（慶応元年9月） 兵庫開港問題に対する朝廷・幕府の動向（慶応元年10月） 堀田正睦・川路聖謨・岩瀬忠震の条約勅許を求める演舌（安政5年3月11日） 水戸藩結城朝道一党への処罰（安政3年4月25日）
D-1-(3)-174	慶応2年4月に長州藩第二奇兵隊が倉敷代官所と浅尾藩陣屋を襲撃した倉敷浅尾騒動に関する風聞
D-1-(3)-175	加賀藩主前田慶寧の建白書（慶応3年正月） 岡山藩主池田茂政の建白書（慶応2年11月8日） 朝政混乱に対する徳川慶喜の建白書（慶応3年9月6日） 二十二卿列参事件の首謀者中御門経之上申書（慶応2年8月晦日）
D-1-(3)-176	兵庫開港に関する建白書（近衛忠房・近藤勇）（慶応3年6月） 長州処分に関する芸州藩世嗣浅野茂勲の建白書（慶応3年6月7日） 朝鮮の動向に関する風聞 出水泉蔵（寺島宗則）の書簡写（慶応元年12月8日） 「琉球之事」（中井竹山『草茅危言』の抜粋）
D-1-(3)-177	長州処分に関する諸建白・書翰 兵庫開港をめぐる外国船の動向（新聞抜粋が多い） 長防士民合議書（慶応元年11月）
D-1-(3)-178	駐日イギリス公使オールコックの日本情勢論評 アメリカ大統領リンカーン暗殺に関する風聞（1865年4月） 長州処分に関する諸建白 奇兵隊に潜伏して情報収集にあたった土州人渡部松之丞からの間書 兵庫開港をめぐる朝議の様子（慶応元年） 兵庫開港を要求するため摂海へ出帆しようとする四国連合艦隊と幕府との交渉（慶応元年）
D-1-(3)-179	將軍継嗣問題に関する風聞 長州征討について前尾張藩主徳川慶勝への老中申渡（慶応元年2月5日） 率兵上京してきた老中本庄宗秀・阿部正外と関白二条齐敬との談判（慶応元年2月）
D-1-(3)-180	長州処分・有免に関する動向風聞 第二次幕長戦争における芸州口・石州口での戦況風聞（慶応2年）
D-1-(3)-181	元治内乱後の長州藩内情についての尋問書 大久保市蔵（利通）建白書（慶応2年7月） 諸藩の鑄銭願（慶応2年） 第二次幕長戦争下の広島の様子（慶応2年7月26日） 京都・大坂で張り出された幕政批判の捨て文（慶応2年4月3日）
D-1-(3)-182	下総での戦況風聞（戊辰戦争）（明治元年4月） 徳川慶喜追討の布告書・奏聞書（『内外新報』第5号抜粋）（明治元年4月17日）
D-1-(3)-183	名古屋 大脇道介日記
D-1-(3)-184	熊本藩士魚住源次兵衛ら五人の建白書（文久2年3月） 大鳥圭介建白書（文久4年正月）
D-1-(3)-185	大坂下向について徳川慶喜の奏聞（慶応3年12月12日） 会津藩主松平容保の京都守護職辞表（慶応3年12月9日） 三条実美ら七卿の有免など朝廷辞令（慶応3年12月10日） 王政復古の号令（慶応3年12月11日）
D-1-(3)-186	芸州藩が長州討ち入りの先鋒を辞退したことについての風聞（慶応2年7月） 芸州口大野村での戦況報告
D-1-(3)-187	ポルトガル・プロイセン・スウェーデン・ベルギー・イタリア・デンマークとの修好通商条約締結についての触書 尾州烏ヶ地新田大野庄兵衛宛大野喜作「佛蘭西都巴里方之書状」
D-1-(3)-188	会津藩家老田中土佐など歎願書 海軍先鋒大原俊実と外国公使との談判（明治元年3月）
D-1-(3)-323	孝明天皇「親征勅語」写（文久2年11月10日） 老中井上清直邸で自刃した彦根藩士加藤吉太夫に関する風聞（文久2年11月16日） 徳島藩主蜂須賀斉裕の建白書（文久2年6月）

作成・山田裕輝

45 慶応期に創刊された新聞の写

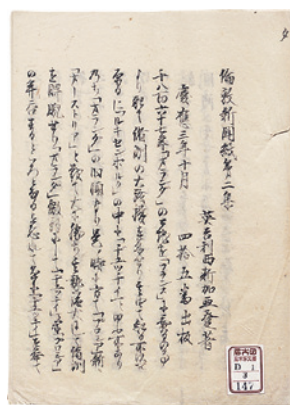
慶応3～4(1867～68)年〈高木家文書〉

高木家文書には慶応期に創刊された数種類の新聞の写が残っており、高木家が国内外の知識の受容に積極的だったことがうかがえる。このうち「万国新聞紙」「倫敦新聞紙」は欧米から輸入された外字新聞の翻訳版であり、「中外新聞」「内外新報」「江湖新聞」はいずれも佐幕派の新聞に分類される。「中外新聞」と「西洋雑誌」は柳河春三によって創刊された、日本人による初の新聞・雑誌である。それぞれの創刊年と主宰は次のとおり。



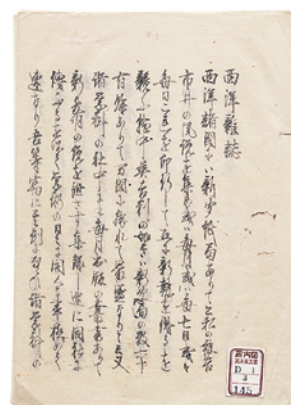
万国新聞紙

慶応3年正月 バックウォース・ペーリー



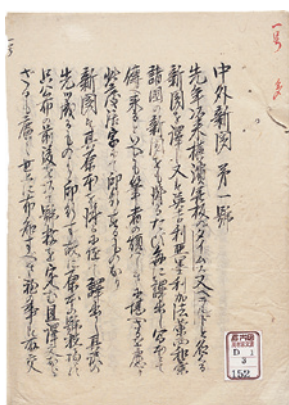
倫敦新聞紙

慶応3年7月 ス加亜登



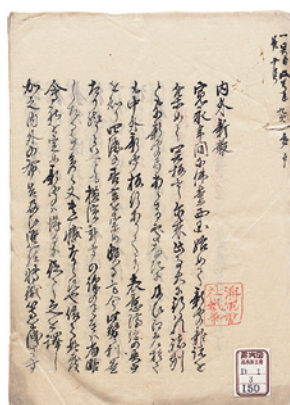
西洋雑誌

慶応3年10月 柳河春三



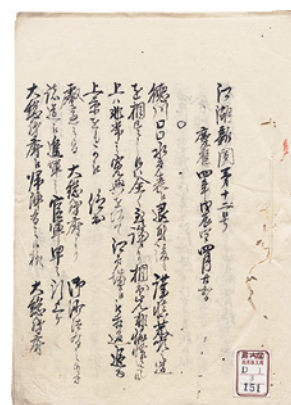
中外新聞

慶応4年2月 柳河春三



内外新報

慶応4年4月 橋爪貫一



江湖新聞

慶応4年閏4月 福地源一郎

参考文献

伊藤孝幸『交代寄合高木家の研究』 清文堂出版 2004年
針谷武志「内陸旗本と海防―交代寄合高木家を例に―」『地方史研究』224 1990年
宮地正人他「愛知県下幕末維新时期史料調査」『東京大学史料編纂所報』24 1989年
吉田常吉『安政の大獄』 吉川弘文館 1991年
三宅紹宣『幕長戦争』 吉川弘文館 2013年
菊地明・伊東成郎編『新選組史料大全』 株式会社 KADOKAWA 2014年
彦根城博物館編『彦根藩史料叢書 侍中由緒帳2』 彦根市教育委員会 1995年
明治文化研究会編『明治文化全集』4, 5 日本評論社 1928年
東京大学史料編纂所編『大日本古文書 幕末外国関係文書之一、二十、二十一』 東京大学出版会 1972年覆刻
維新史料編纂会編『維新史』1～5 吉川弘文館 1983年復刊
『大垣市史』上巻（通史）、中巻（分科志） 大垣市役所 1930年
『大垣市史 通史編』自然・原始～近世、近現代 大垣市 2013年
『上石津町史 通史編』 上石津町 1979年
『新修上石津町史』 上石津町教育委員会 2004年
『新修彦根市史』3 彦根市 2009年

名古屋大学附属図書館 附属図書館研究開発室

館長・室長	森 仁志
特任准教授	石川 寛
研 究 協 力	長屋 隆幸
	辻 公子
	桐井 吉美
展 示 協 力	山田 裕輝

事務担当

情報サービス課長	高野 恵子
同課長補佐	伊原 尚子

名古屋大学附属図書館2016年秋季特別展（高木家文書展）

旗本高木家の幕末

会期：2016年10月15日（土）～ 11月8日（火）
会場：名古屋大学中央図書館2階ビブリオサロン
主催：名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

本図録は石川寛と山田裕輝が執筆した。

本図録は JSPS 科研費15H03237および平成28年度地域貢献特別支援事業の助成を受けたものです。

仰付被下置人
以上

高木 彈正

名古屋大学附属図書館2016年秋季特別展（高木家文書展）

旗本高木家の幕末

発行日 2016年10月15日

編集・発行 名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 B3-2(790)

TEL : 052-789-3678 (受付) FAX : 052-789-3694

<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/>

ISBN 978-4-903893-16-7